福岡大学医学会ニュース

第19号

福岡大学医学会
福岡市城南区七隈
福岡大学医学部内
印刷　福岡印刷株式会社
福岡市博多区東那珂一丁目10-15

第一回福岡大学医学 国際シンポジウム開催さる

福岡大学に医学部が開設されて十八年が経とうとしている現在、「教育スタッフや卒業生の研究を主題にした国際シンポジウム（FUSMS）を行おう。」という声が高くなっていた。国際的な医学研究社会において福岡大学の存在を確かなものにする必要があり、そのためには福岡大学の名の下に発表された論文成果の単行本を作るのが最も良い、ということになった。

第一回シンポジウムに相応しい主題として、福大における医学研究の中から数題の候補テーマを検討し、個々の研究者に実際の開催を当たった。その結果、基礎－臨床医学の両面から見て適当と判断した濱崎教授の研究を主題にすることになった。

シンポジウム風景

楠の若葉に包まれたセミナーハウスで、五月一日から三日間、セミクローズの会で熱心な発表と討議が行われた。主題は「Recent Advance in Molecular Mechanisms of Anion Transport」で、濱崎教授グループが研究対象としているpyrvate物質だけに止まらず、細胞膜で、陰イオンを透過させる膜内タンパク（Brand-3タンパク）に焦点を置いたものとなった。このタンパク粒子は細胞膜の全層を横切って配置されている大型のもので、塩素イオンや炭酸イオンなどの透過に働くものであるから、ガス交換を主な働きとする赤血球や、神経、腎臓などの働きを果たさせる上で重要な構造である。

参加したアメリカ、カナダ、ドイツ、イギリス、フランスからの十七名と日本からの数名を加えた発表は、数十名の討議参加によって一層実のあるシンポジウムとなった。陰イオン透過の操作が、タンパク自体の構造、透過作用のメカニズム、機能の促進あるいは抑制に働く物質や細胞環境、さらには臓器におけるタンパク産生の遺伝子発現など多方面から検討されていた。この発表と討論の内容はエルスピア出版（オランダ）から今秋に公刊される。

シンポジウムの参加者は多少の知人同志はあったようだが、論文や書本を通じてお互いを知っていた程度で、福岡の地で初めて対面したという方々ばかりのようであった。それだけに、発表内容が斬新となり討論も熱のこもったものとなった。

シンポジウムの基本的内容は臨床医学にも応用が大きく、血液保存、活性度の大きい輸血、移植臓器の保存、腎機能の促進などすでに特定薬品の利用も進められていて、今後更に広い範囲で薬物作用のメカニズムも明らかになるものと期待される。

福大医学シンポジウムは資金の都合で毎年開催するわけにはいかないだろうが、二～三年後には次回を計画したい。若い研究者や卒業生諸兄姉の世界レベルの研究を中心にして、学問価の高い発表と討論の場にしたい。

今回の第一回シンポジウムの実現は福岡大学当局、医学部同窓会、医学部父兄後援会および個人篤志家の御賛意、御支援があって可能であった。深い感謝を捧げるものである。

（三好萬佐行医学部長）

『着任挨拶』 福岡大学医学部での スタートに際して

永山在明

微生物学講座教授

――医学の永遠の命題は「人間の生命の尊厳性」を「解明」し、「人間の生命の尊厳性」を「理解」することにある。「解明」は自然科学としての医学である。従ってこれまで先駆者が努力して積み重ねて得てきた知識、方法論を学んで、その上に新しい現象、原理を見い出して生命のメカニズムを解明することである。「理解」が持つ意味はむしろ哲学、芸術など人文科学の分野も含めて、医学に携わる我々独りひとりが、絶えず自問自答しながら考えるべき問題である。――

医学にはこの二面性が本質的に存在することを肝に銘じながら、これまで医学教育・研究に私なりの努力を続けてきました。

私自身の履歴を振り返ってみますと、昭和三十一年四月に九州大学医学部に入学して、十二年間の学生、インターン、大学院学生を経て、昭和四十二年四月に文部教官助手として医学教育に携わるようになりました。助手、助教授と十一年間九州大学に勤務したのち、佐賀医科大学医学部の開講にともなって、昭和五十三年四月から平成元年（昭和六十四年）三月末まで佐賀医科大学微生物学講座を担当して来ました。この間ちょうど十一年の年月が流れて平成元年四月に福岡大学医学部に着任することになりました。不思議にも十一年の周期で、己の置かれる立場が変わることが運命づけられているような気がしています。このように絶えず新しい環境、職場で自分の気持ちをリフレッシュして己れを試すことが出来るのは、人生にとってこの上ない幸せだと思っています。

パスツール、コッホが近代細菌学の礎を築いて以来、微生物学は近代医学の進展の中心的役割を果たしてきました。免疫学、ウイルス学そして最近の分子生物学の発展は目ざましいものがありますが、いずれも微生物学がその基礎になっています。また、生活環境の改善、医療技術の革新、新薬の開発等によって強毒菌による伝染病は減少する一方、緑膿菌など弱毒菌による感染症やAIDS, ATLのような新たな感染症との戦いには終わりがなく、いまや微生物学講座だけでこの全ての領域をカバーすることは困難な状況になってきています。福岡大学医学部の教育および研究の充実の点から、これから考えて行かなければなりません。微生物学はまた臨床医学とも密接な関係にあり、病院の臨床検査部のなかでは絶えず感染症の起炎菌の同定、有効薬剤の検索、血清学的診断が広く行われています。この分野にも、細菌同定の機械化やDNAプローブによる迅速診断技術が導入される方向にあります。たとえばGen-probe社のribosomal-RNAに対するcomplementary DNAをプローブにした診断法が開発され、クラミジア、淋菌、結核菌、非定型抗酸菌、肺炎マイコプラズマ、レジオネラの診断が数時間で可能となり、すでに実施に向けて走り始めています。この診断法はさらに多くの細菌、ウイルスに範囲が広がり、またデータ管理にコンピューターが日常業務に利用されるにつれて、病院臨床検査部のなかの細菌検査部門の様相を一変させることになると思われます。わが国では医療費が一定の枠に抑制されつつある現状を考えると、迅速かつ適正な微生物学的診断法に立脚した治療以外は、適正な医療とみなされなくなる可能性さえあります。これから各臨床部門とも連係を密にして臨床細菌学も重視した微生物学を福岡大学医学部のなかに根づかせることも大事なことと考えています。ともすれば基礎医学と臨床医学は異なる体系と考えるおそれがありますが、しかし、「人間の生命の尊厳性」を学ぶと言う立場の上では同じである筈です。十一年目に再び自分自身をリフレッシュする機会に恵まれたことを感謝して、これまで佐賀医科大学で学び経験して来た良い部分を本学にも紹介しながら、福岡大学における医学教育・臨床・研究の一体化に微力を尽くしたいと思っています。

「親心・子心（1）」

―指導教官からの提言―

内科第二講師　朔　啓二郎

私は本学医学部第一回卒業生ですので、医師になってすでに十一年たちました。学生時代は十年選手のDr.に対し、尊敬と憧れを持ってながめていましたが、時の経つのは早いものです。今、自分が医学生や研修医からどのように見られているかは別として、私も皆さんを教え、指導する立場になりました。日本の医学部では教官スタッフに診療、教育、研究と三部門に置いてみることの重要性を、十年経った研究生活でやっと感じ取れるようになった気がします。かなり曖昧とした言い方ですし、当然学生やフレッシュマンDr.には理解できるはずがありません。それでは、一体どうしたら良いかと言うことですが、決してずるく、またうまく立ち回ったりしないことだと思います。これは個人個人の性格的なものも少しは関与してくるでしょう。確かに何ごとでもポイントを摑むことは大切ですが、研究生活を続けていますと、案外面白い現象にもよく出合います。Broad view（広い視野）とnarrow view（狭い視野）との関係がとてもおもしろく思えてきます。それと同時に発想の転換、新しいアイディア、及び診断、治療、研究に対する積極性、情熱、そして自己同一性は多分hard workからしか生まれないと思えるようになったことです。ですから、ただひたすら、その時（抄読会、研究会、発表、学会）だけがすめば良いとする姑息的、また対症療法的な処世術には感心しません。実際に、残念ながらこうした現象は今日の学生や研修医に一番多く見られる症状です。広い分野に興味をもって努力をおしまない訓練、事に対するsincerityな態度は学生時代から慣用しておくことが大切だと思います。

②Promotion

国家試験は医師になる手段で目的ではありません。国試に限らず、各種テストをクリアすることは大切なことで、これは医師として将来生きて行く上で最低限の要求です。私自身も時々使って後で反省しているのですが、「これは試験に出ずぞ」と言うことがよくあります。ポイントを強調しておきたいためですが、その時、学生サイドからザァッとノートをとる音が聞こえてきます。教育者サイドにはかなりしらけたものです。講義やSGTであれだけ教え詰め込んだつもりなのに新しく入局してきた研修医に高脂血症のタイプ分類はと質問すると完璧に忘れています。概念を頭に入れておかないと非惨答選択性の国家試験が多分、自由な発想や考えること、想像力の重要性をsacrificeしたためかもしれません。試験は自分自身をプロモートする手段と考えるようにして下さい。

③Punctuality

臨床に限らず社会生活で絶対必要なことです。二十人に対し一分遅れることは二十分間のhuman time wasteをひきおこすと言われています。病棟内でのミーティング、宴会一つとっても、punctualに物事をはじめることの意義は絶対に大切です。現代人として時間にルーズであることはその人にとって大きなマイナスになります。

以上三つのポイントは最近の学生諸君をみて感じた基本的な私からの要求です。立場が変わって、皆さん方には初めて気づく人もいるかもしれませんが、皆さんの学力、生活レベルの向上のため積極的に取り入れて頂きたいのです。母校を立派にすることにも連なることと思います。

「親心・子心」解説!!

最近の若い医者は!!と嘆く巷の声。これを狼の遠吠えと聞いて、節労を旨とする人達。なかなかうまく噛み合わない。

今回から身内同士の「親と子の言分」としてこの欄をもうけた。兄貴分から投げられた球を研修医がどう返すか、次号を御期待下さい。

（編集子）

自己紹介

昭和六十三年十一月以降、昇格又は赴任された教授、助教授、講師の方々。

病理学第一教授　岩崎　宏

九大を昭和四十四年に卒業し、進路を決めるのが大変に厳しい時代でしたが、菊池昌弘先生（現福大教授）にお世話頂いたのが病理に入るきっかけでした。先生は当時九大二病理で、特異な病像を示す壊死性リンパ節炎の研究に没頭なさっていました。おかげで私も新しいentityである“Kikuchi disease”が誕生する現場を拝見でき、大変な刺激を受けたことをよく覚えています。その後私は遠城寺宗知教授のご指導を受け、人体の腫瘍病理とくに軟部腫瘍の粗織学的分析に従事しました。はじめは遠城寺教授にお供して、後には単独で毎週のように手弁当で九州各地の大病院を回り、保存されている病理標本から目的とする検体を捜し出し、ブロックを借りて帰り、組織標本を再作製して検索するというのが日課でした。この間に調べた病理診断書は十万件以上におよび、大変ハードな仕事でしたが、人体病理学の方法論と考え方、そして研究のまとめ方を徹底的に学んだことは、現在の仕事をつづける上でも非常に役立っています。

福岡大学の助教授に採用されたのが昭和五十三年で、以後は病理学教室で菊池教授ならびに竹林教授のおかげで大変楽しく働かせて頂いています。菊池教授には血液病理とくに脾臓と細網内皮系について、また解剖学の三好教授には電子顕微鏡学の基礎から懇切丁寧なご指導を賜り、研究の範囲と奥行きを広げることができ、大変幸せでした。

現在私共のグループは臨床各科のご協力で種々の腫瘍細胞の培養を行なっています。中でも整形からきた諫山君とともに悪性線維性組織球腫のcell lineの樹立およびモノクローナル抗体の作製にはじめて成功したのは非常に幸運でした。また最近のヒットの一つは、城崎君（現一外科）が我々と共同でまとめた胆嚢癌の培養系に関する論文が米国の癌学会誌Cancerにaccept されたことです。福大の卒業生には恐らく最初の快挙と思いますが、彼につづく人がどんどん出てくれば、わが福大の国際化も一層推進されると期待しています。

生化学第一助教授　立石カヨ子

大阪大学病院より福岡大学へきて、四年が経ちました。この間、神経及び消化管ペプチドに関する仕事をしてきました。ペプチドは互いに共通のアミノ酸配列を分子内に持つ事が多く、特異的に測定する事が困難な場合がしばしばあります。このため、D－GL（D－グルタミン酸とD－リジンの重合体）の免疫寛容作用を利用して、目的の特異抗原決定基に向った抗体を選択的に作製する新しい方法を開発しました。この方法を用いて、従来、特異抗体の作製が困難であったコレシストキニン、ニューロキニンA及びB、その他それぞれに特異的な抗血清を作製し、それらの測定法を確立しました。その測定法を用いて、それらの物質の病態生理学的意義の解析を本学を初め、他大学の研究室と共同で行っています。このように、まわりの方々の協力を得て研究を進めています。最近では、ニューロキニンBの血圧上昇作用とその機構に関する新しい知見が得られています。今後、より充実した成果が得られますよう努力していきたいと思っています。

歯科口腔外科学助教授　福田　仁一

昭和二十一年北九州市小倉で生まれ、小倉で育ち、大学も小倉にあります福岡県立の九州歯科大学で学びました。昭和四十七年に大学卒業と同時に、同大学の第一口腔外科の大学院に入り、昭和五十一年から助手として残り、十三年間ずーっと、ずーっと小倉に居ました。小倉以外で住んだことがあるのは、留学先のスイスのバーゼルのみです。そしてやっと福岡という新しい地を見付け、都教授のもとで助教授としての任務を与えられました。

臨床面での専門は口腔外科で、その中でも顎変形症（下顎前突など）の外科的矯正や顎骨再建を専門としています。また研究面では顔面外傷学の中で骨の治癒に対する促進法とその過程について研究しています。

趣味は車です。学生時代はモータースポーツにどっぷりとつかり込み、国際B級ライセンスを取って活躍していました。最近はそのエネルギーを臨床・研究に注ぎ込んでいるつもりです。

どうぞ宜しくお願い致します。

内科第一講師　木村　暢宏

昭和二十二年一月福岡市住吉生まれ。昭和四十八年熊本大学医学部を卒業し、九大第一内科入局。二年間の研修期間を終え昭和五十年六月より血液研究室（主任：仁保喜之：現在九大第一内科教授）に入りコロニー培養法による造血幹細胞と分化増殖因子の研究。血液患者とみると唯々骨の髄穿そして培養の日々をおくったその頃が懐かしく思い出されます。気が付いた時には、学位を取得し留学を迎える頃となっていたわけで。昭和五十七年八月カナダのオンタリオ癌研究所のMak W. T. 博士のもとに留学。たまたまここで偉大なる研究（Tリンパ球抗原受容体遺伝子の発見）がなされた為に造血幹細胞培養しか知らなかった私は仕方なくモノクローナル抗体作成、更にけっして踏み入る事のない分子遺伝学の分野を手掛ける事となりました。実験台の上には“Must win（必勝）”の文字が張られ激しい学問のデッドヒートの毎日でした。利根川進先生にノーベル賞をさらわれましたが、Mak博士もカナダの栄誉ある賞を受けられました。おかげさまで二度と経験できない数多くの事を学ばせていただきました。昭和六十二年三月に帰国、四月より福大第一内科血液研究室に着任。現在奥村教授の寛大さに甘え、また第一病理菊池教授のご好意とご協力により悪性リンパ腫や骨髄性白血病などの造血性腫瘍におけるT細胞受容体遺伝子解析等に励んでおります。今後は分子生物学的手法をいかに臨床血液学に応用していくか？　すでに卒業して十六年。少々体力も落ちて来ておりますが、いつまでも気力と感性だけは失いたくないものだと思っております。

内科第二講師　笹栗　学

私は昭和二十八年福岡県嘉穂郡稲築町の生まれで、田川高校を経て昭和五十三年鹿児島大学を卒業しました。卒業後直ちに福岡大学二内科に入局しました。入局の動機は学生時代にアンジオテンシンIIのアナログの講義を荒川教授と一緒に研究されていた先生からうけたのが印象に残っていたからだと思います。

入局後は研修医・医員として臨床の経験を積み約四年前より高血圧の生化学的研究をしております。研究の内容は降圧物質であるキニンに関することで、昨年、研究も一段落し学位を取得することができました。その研究過程で身震いする程の感動を経験できたことはこの上ない喜びと思っています。やっと研究の醍醐味がわかってきた所です。

趣味としては現在ゴルフの上達に力を入れています。（力を入れすぎてうまくならないのかもしれませんが）スカーッとした気分になれるのが何ともいえません。

充実した毎日を送っていますが、今後とも頑張っていきたいと思います。

整形外科講師　原　正文

私は、八幡の帆柱山のふもとで育ちました。縁あって福岡大学医学部に入学し硬式庭球部に入ったのが、クラブ部長である高岸教授との運命の出会いでした。在学中は、クラブを中心にしておもしろおかしく過ごし、六年の学生生活を終え、昭和五十四年に高岸教授率いる整形外科に入局させてもらいました。二年の研修医期間が終わり教授の勧められるままに大学院に入学し、ここで現在も研究を続けている肩関節鏡のテーマをもらいました。肩関節の関節鏡が現在この様に世界的に発展することを当時誰が想像し得たでしょうか。高岸教授の先見の明にはいつも驚くものがあります。その後関節鏡技術取得のため東京逓信病院で四カ月間の研修をうけ、肩関節にも関節鏡が応用可能であるという自信で福岡に戻って来れたのも身重の家内の協力があったからこそと今でも感謝しています。東京から戻り、関節鏡の基本的研究として肩関節の解剖学を田川教授に二年間御指導していただきました。解剖学実習室で、たった一人で三十体の屍体と過ごした夜の事を今でも忘れることが出来ません。しかしこの事で肩関節の解剖は任せてくださいという所まで十分に理解できました。現在、早期社会復帰が可能な鏡視下手術を旗頭に、スポーツ選手の肩関節障害を中心として、新しい手術法の開発に夢を広げています。

手術部講師　櫻木　忠和

本学を昭和五十五年に卒業して早くも十年目を迎えました。当教室に続き福岡赤十字病院で臨床研修医を終え、引き続き十カ月間の麻酔医としての勤務後、教室に戻ってまいりました。今振り返ると、この最初の三年間で臨床麻酔医として知っておくべき大半を経験出来たのではないかと思えます。三年前に一人娘に扁桃腺摘出術の全身麻酔をかけ、麻酔医としての自分自身を厳しく再認識しました。

研修一年目の終わりに、持続硬膜外カテーテル挿入に基づく硬膜外腔感染を予防するための皮膚消毒法を調べるように教授に言われて以来、細菌と寒天培地と消毒薬と麻酔の毎日が現在まで続きました。学位は今までの臨床研究を裏付けるための皮膚消毒薬効力検定の実験的研究で取得しました。

趣味は、学生時代は空手とマージャンでしたが、最近水泳とスキーを始めました。初心者でありなかなかうまく出来ません。また、休暇には出来るだけ遠方に旅行することを楽しみにしています。

筑紫病院　整形外科講師　城戸　正喜

昭和五十三年に福岡大学の第一回生として卒業し、すぐに本学整形外科教室に入局しました。二年間の臨床研修の後、大学院に進学し高岸直人教授の御指導を受け、福大式全人工肩関節の開発における基礎的研究を行いました。その研究の際、本学工学部の諸先生方、特に機械工学科の百武秀教授には実験を通じて、医学とは違った勉強をさせていただきました。大学院卒業後、日本海員掖済会門司病院に約一年半勤務し、昭和六十年十月より福岡大学筑紫病院整形外科の松崎昭夫教授のもとに勤務しています。筑紫病院では、少ないスタッフのため、多忙ですがいろいろな症例を経験し、気がつけば三年半が過ぎてしまった感じです。これを機にして不勉強のためたくさんある臨床上の解らない点に対して少しでも解明出来る様にいろいろなアプローチをしたいと考えております。

教室紹介

福岡大学薬理学

本教室の現在の人員構成は、古川教授、桂木および山田助教授、櫛来、守下、および宮本助手、山田教育技術職員よりなり、さらに六名の大学院生、五名の研究生、一名の中国人研究員が教育・研究に励んでいます。

本教室の、大学院医学研究科での所属部門は、専攻分野が病態機能系、専攻科目が神経薬理学となっています。したがって研究内容は、中枢神経、神経節、自律神経とその支配臓器（循環器、平滑筋その他）などの分野で各スタッフがそれぞれを専門領域とし、機能的アプローチを中心においた研究を行なっています。

本教室の研究は、血圧の調節には中枢が重要な役割を担っており、従来まで研究されてきたノルアドレナリン性およびセロトニン神経以外の、近時見いだされてきた神経性ペプチドおよびアミノ酸の中枢性血圧調節への関与、あくび行動、常同行動その他の行動の誘発ならびに調節に与る中枢神経機構、プロラクチン分泌に与る中枢および下垂体レベルでの調節機構、神経節伝達は従来いわれてきたコリン性機構のみでなく複雑であるが、カテコールアミン、ギャバなどの神経性物質、さらにカルモジュリン、プロテインキナーゼCなどの細胞内第二媒介物質の関与、自律神経終末および支配する筋からATPが放出されているが、このようなプリン性調節機構、筋収縮と細胞内カルシウム、近年関心が強くなっている東洋医学と関係していくらかの漢方薬の作用機序の解明、などである。研究というのは、不明なことの多い医学のどこかの部分に興味の焦点をあて、力まず楽しみながら堀り下げてゆくことかと思っています。

（文責・古川）

海外便り

テキサスの想い出　曽爾　彊

昨年四月より、海外研修を命ぜられ、一年間、テキサス州立大学医学部サンアントニオ校へ留学しました。近年アメリカでは、解剖学教室が少なくなり、多くの教室が細胞生物学教室に変身しております。私のおりました教室も御多聞にもれず名称は、Department of Cellular and Structural Biology で、誰も解剖、組織学で研究を進めている人はいません。教室のほとんどの人は、今流行のDNAや病原遺伝子由来蛋白質を使って研究を進めております。私も、今までの一連の仕事の他に、下垂体の発生とこの蛋白質との関わり合いについて研究をしてきました。

テキサス州立大学サンアントニオ校は、医学部の他に歯学部、看護学部など五つの学部で構成されています。キャンパスの広さは福岡大学の五倍くらいで、その中に五つの学部が散らばっています。学生の朝は早く、八時には登校しています。図書館で居眠りしていること、授業をさぼってテレビゲームに打ち興じていることなどは、日本の医学生とあまり変わるところはありません。しかしほとんどの学生は、親がかりではなく、自分で学資を用意して入学してきます。そのため、学資の続かない学生は、一時休学をしてアルバイトで学資を貯めて、数年してからまた、復学しています。ですから結婚している学生が沢山入学してくるそうです。

教室は朝七時半位から始まりますが、職員は八時ごろに出勤してきます。夕方はほとんど例外なく五時には帰って行き、六時になると、大学の入口がすべて閉まり、出入りはインターフォンを通じて行われます。六時以降は学内に人が少なくなり危険ですが、残って仕事をしているのは、ほとんどが日本人です。やはり働き蜂です。

テキサス州立大学サンアントニオ校には、日本人の留学生が二十家族ほどいます。福岡に近い所では、九州大学歯学部解剖学教室、あるいは熊本大学内科学教室から一家族ずつ来ていました。サンアントニオ市は、熊本市と姉妹都市なので、熊本大学の留学生は、熊本市の代表部もかねていました。

サンアントニオ市はアメリカ合衆国の中でも古い町で開拓時代の面影を残しており、日本の町でいうと丁度金沢市といったところでしょうか。有名なアラモの砦を中心に発展してきて、人口は約八十万人と福岡を一回り小さくしたような町です。テキサスといいますと砂漠の州と思われがちですが、大変緑の豊かな美しい町です。

（三頁へ続く）

（二頁より続く）

度前後で那覇市と同じくらいです。そのほかに大きな町としては、ケネディで有名なダラス市と、NASAで有名なヒューストン市、メキシコ国境の町エルパソ市があります。いずれも土地が豊かなせいか駐車場一つ見ても広々とした、大変きれいな町です。テキサス州は日本の面積の約二倍で、そのため、隣の町であるヒューストンに行くのもハイウエイで三時間半くらいかかります。隣町へ行くよりも、隣の国であるメキシコへ行く方が近く、私たちも、よくメキシコへ買物に行きました。そのためサンアントニオ市では英語とおなじくらいスペイン語が通用します。自動車の免許試験でも英語、スペイン語と中国語で試験が受けられます。日本語は駄目でした。

食べ物の話題を一つ。サンアントニオ市は、メキシコの影響を強く受けているため至る所メキシコがあります。食べ物にもそれがあり、ハラペニオというピーマンによく似た野菜があります。これはやたらに辛く日本の激辛もこれにかかると中辛位です。初めのうちはとても食べられませんが慣れるとそれがないと何となくもの足らなくなります。一度食べると三度楽しめると言われています。最初は口で、次は胃で、最後は出口で。

取り留めのない話になりましたが、忠告を一つ。アメリカへ行ったら便秘にならないように。トイレの扉の下四十センチくらい開いているか、ハイウエイのそれはまったく扉がありません。ハイウェイのトイレでは、中がまるみえで、おじさんが中から“How doing!”。女子トイレの扉も下はやはり開いているそうです。

アメリカ留学を終えて

今田　達也

アメリカ西北部の中心地シアトルは、人口五十万人を越えるワシントン州最大の都市で、一般には水と森の都の愛称で親しまれ、ボーイング社を中核とする工業都市です。また北方約一六〇kmはカナダとの国境で、バンクーバーまで車で二時間半で行くことができ、とても素晴らしい所であります。このシアトルの中心部にあるThe Hope Heart Instituteを昨年五月より訪れ、Dr. Sauvageのもとで主に臨床面（手術手技）の研究をさせて戴きました。

Dr. Sauvageはワシントン大学医学部の教授で、特に血管外科の分野では世界的に有名であります。彼の開発した人工血管は現在日本の多くの施設で用いられています。

このInstituteはとくに人工血管の研究所であり、実際の臨床はこの隣にあるProvidence Heart Center にて行われていました。ここでは年間一三〇〇～一五〇〇例の開心術（主に冠動脈バイパス）や約一〇〇〇例の血管の手術がなされておりました。

私はアシスタントとして毎日手術につかせて戴き、特に開心術では他に心臓外科のレジデントがいなかったため、直接彼の指導を受けることができたことは好運でありました。しかし、彼らの仕事はかなりハードで毎日夜遅くまで働き、かつ週末も開心術を行い、基礎研究も同時にこなすなど驚くことばかりでした。はじめは慣れない生活と通じない英会話でスリムな身体になりましたが、時が立つにつれ残念ながらそれも戻り、しだいに彼らの間にとけこむことができました。特に術中での会話は苦労の連続であり、ほしい器具が思うように取れず勝手に取ってナースに叱られたものでした。

渡米後半年経った頃、この施設では大血管（解離性大動脈瘤、胸部大動脈瘤など）の症例が少なかったため、テキサスのBaylor 大学のDr. DeBarkey, Dr. Crawfordを紹介して戴き訪れることができました。世界的に高名な学者に会えただけでも感激し、何を話したのか覚えておりません。

なかでも、Dr. Crawfordの手術は評判通り早くかつ正確で、何故あのように早くできるのか私には残念ながら理解できませんでした。テキサスを後にして、再びシアトルに戻るとすっかりあたりの山々は雪景色に変わっておりました。シアトルは日本のような四季の豊かさはありませんが、渡米した頃の五月は百夜で夜十時頃まで明るく、夏は湿気がなく木陰に入ると涼しく感じられました。また、あちらこちらで、色とりどりの花が咲き誇り、公園で見かけるリスの姿もはじめは珍しく思えました。しかしこのような心地よい季節も十月の下旬までで、それ以後は雨が多く、優うつな日々が続きました。聞くところではこの時期に自殺者が急増するとかで、なんとなくわかるような気がします。家族との生活は途中からでしたが、それぞれに実りの多いアメリカ生活を送ることができました。最後に、今後少しでもこの経験を生かすことができるよう努力したいと思っております。

ケニアから

波部　重久

ケニアと言えば野性動物の楽園ぐらいしか思いあたらぬ人も多いかも知れません。この国は一九六三年に独立以来アフリカ諸国の中では比較的安定し、アフリカでの西側諸国のかなめとして重要な位置を占めていますが、これといった鉱物資源はなく、工業も発展しておらず、コーヒー、紅茶、ナッツなどの農産物と観光収入および各国からの援助がこの国を支えているといえます。とくに日本は多くの援助国の中でも、援助額ナンバー・ワンですし、約千名の日本人が首都ナイロビを中心に生活するなど日本との関係を強めています。

さて、私は昨年三月より、ナイロビ市内西部の丘陵に日本の無償資金協力で建設されましたケニア中央医学研究所Kenya Medical Research Institute (KEMRI)に寄生虫学の専門家として派遣されています。この研究所はケニアにおける伝染病、下痢症、寄生虫病等の基礎医学の総合的研究および対処療法の確立ならびに公衆衛生の向上に寄与することを目的に設立されたものです。現在、KEMRIは次の九つの研究センター Uirus Research Centre, Leprosy and Skin Diseases Research Centre, Vector Biology Control Research Centre, Clinical Research Centre, Biomedical Sciences Research Centre, Microbiology Research Centre, Centre for Research Training and Medicine そして Drugs Research Centre によって構成され、共同研究部門として電子顕微鏡室、RI実験室、Pレベル実験室、実験動物舎、さらにモデルクリニックとして診療部門、病棟部門（四十床）、解剖室などをそなえる、東アフリカ諸国の中で最も整備された医学研究所となっています。ケニアでは人口の半数は十五才未満の子供であり、幼児死亡率は極めて高い水準にあります。そこでケニア政府はこのKEMRIの施設を利用し、その原因となっている下痢症とくに寄生虫、細菌、ウイルスの基礎研究及び予防研究を行うこと、またそれをモデル地区に応用し予防対策を講じることを目的として、日本に技術協力を要請しました。これに基づき昭和六十年より、常時十名弱の日本人専門家が、この三分野で研究体制の確立、人材の養成、研究指導を行っています。さらに我々日本人以外にもヨーロッパ諸国、アメリカ等の研究者もこの施設を利用し研究を行っています。

ケニア中央医学研究所の全景（ナイロビ）

私の属しています寄生虫学プロジェクトはナイロビから五〇〇km東方、インド洋岸モンバサ近くのクワレを疫学調査地としてビルハルツ住血吸虫症の流行状況、伝播を調査し、その予防とコントロールを研究するため住民の検尿と治療、水系汚染度調査、媒介貝の調査を行っています。このため月の三分の二はナイロビのKEMRI実験室内で仕事をし、あとの三分の一ほどは、まさにアフリカの部落というところで生活しています。ナイロビは標高一、七〇〇m前後の高原にあり、ケニアの軽井沢といわれ、世界でも最も気候の良いところです。しかし、フィールドは熱帯気候ケニアの中でもビクトリア湖周辺とならび衛生状態の悪いところです。住民の七〇～八〇%は住血吸虫症の患者、子供の七五%以上がマラリア脾腫を示すほか、フィラリア、糞線虫、赤痢アメーバをはじめ種々の寄生虫がみられます。村に足を踏み入れると、必ず何人かのマラリア症状を示す人に会いますし、庭先で体に衣を巻きつけ、ほとんど動かない患者を見るのも稀ではありません。このように自の目で種々の寄生虫症を見、流行地の真っ只中にいると、日本での寄生虫の講義などのあり方など、いろいろ考えさせられます。またこの周辺はアフリカ象の生息地でフィールドを廻っている時、大群とバッタリということもしばしばです。時にはライオンがでることもあります。

さて、日本からナイロビまでは、ほぼ三十時間、往復航空運賃二十五万円前後。ここKEMRIにも日本から医学部の学生さんが時々訪ねて来られます。皆様も一度ぶらりとアフリカ旅行というのはいかがでしょう。

教室紹介

福岡大学心臓血管外科学

当教室は、大学病院の開院に遅れること数年して昭和五十年八月に心臓外科を開設、また昭和五十四年十一月には血管外科も標傍し、心臓血管外科として診療を行っている。

若手医局員の入局も増え現在の人員構成は浅尾学教授以下、木村道生助教授、助手六名、医員二名、研修医二名、大学院生三名、その他関連病院出張者および海外留学者の六名で計二十一名である。

臨床面では、月、水、金が手術日で特に月、水は開心術、金は血管外科を行っている。火曜日は助教授回診、木曜日は早朝抄統会の後、教授回診が行われ、その後術前術後検討会がもたれている。特に、術後検討は術者の手術に対する今後への工夫についての報告があり、活発な討論がなされている。定期的な第二内科循環器および小児科循環器グループとの症例検討会に加え、また第二外科の呼吸器外科グループとの症例検討も行い、肺癌の縦隔や心大血管領域への侵襲例にも、人工心肺使用による手術適応拡大など共同で取り組んでいる。また、呼吸器外科に留まらず他科からの相談や処置、手術の助勢なども増加しつつある。当科の臨床例の特徴として高齢者の患者が多く、虚血性心疾患、大血管および末梢血管などの血管外科症例の増加が近年目だってきている。研究面では、体外循環関係の研究や心移植心保存についての基礎的研究、さらに三尖弁閉鎖不全の病態についての臨床面での研究がなされ、血管外科分野では現在虚血肢における血管エコーの研究を進めている。

教育におけるγGTPの学生への指導は教授をはじめ教室員全員が熱心に取り組んでいる。

教室のレクレーションは年間行事として、四月の花見、五月の連休明けの医局旅行、七月の海水浴、十二月の忘年会などである。その他スポーツとしては、浅尾杯をはじめ専らゴルフが盛んではあるが上達が遅く、飛びぬけて上手な医局員は出ていない。

心臓の手術ではほとんどの患者さんが死と隣り合わせにあり、緊張と苦労の毎日である。しかし術後、日に日に回復していく患者さんの姿をみると、うれしさと共に心の充実感を味わうことができる。われわれは新しい若い力を待っています。

（文責・今田）

第八十三回 医師国家試験 合格者と入局先

平成元年四月八日、九日に行なわれた第八十三回医師国家試験に本学から百三十七名が受験し、百五名が合格した。合格率は七十六・六%であった。

合格者の研修先は（福大病院研修生は科名のみ）次のとおり。

相戸　伸仁　放射線科
新垣　元　琉球大精神科
有野　晃司　熊大内科二
池田　敏郎　鹿大産婦人科
泉　浩太郎　鹿大内科三
厳原　倫子　鹿大内科二
岩永　真一　外科一
上野　恭司　筑紫病院脳外
榎本　正和　内科二
大田　和弘　内科一
大濱　篤　琉球大内科一
大山　哲寛　麻酔科
貝原　良太　佐医大内科
柏村　晋吾　広大内科二
河原　一雅　外科一
絹原　寛士　熊大整形外科
木村　一雄　整形外科
金　哲浩　内科一
金　義昭　脳神経外科
桑原　元尚　外科二
検見崎　裕　麻酔科
古賀　まり　久大内科四
小松　千代　小児科
呉　義憲　脳神経外科
佐藤　茂　筑紫病院内科
志賀菜穂子　大分医大内科一
篠原　徹雄　外科二
諸喜田　林　筑紫病院内科
陣林　伯禎　長大整形外科
関　幸彦　久大内科三
宗　祐人　筑紫病院内科
高尾　岳久　精神科
高松　哲也　外科二
竹中　幸治　整形外科
田中　達朗　筑紫病院脳外
田原　尚直　整形外科
為末　敏　外科一
張　敬範　整形外科
図師伸一郎　皮膚科
中小田麻衣子　小児科
中島　雄一　泌尿器科
長井　健祐　久大小児科
永井　哲　外科一
林　昭太　日赤医療センター
原　弘光　泌尿器科
平田　和彦　麻酔科
広橋　紀正　健康管理科
古谷　幸子　山大眼科
平敷　健　琉球大
松岡由香里　筑紫病院内科
宮嶋　靖士　内科一
迎　雅彦　麻酔科
護山　健悟　内科二
山内　祥弘　久大外科一
笠　健児朗　外科一
幾野　俊英　筑紫病院外科
井関　貞文　愛媛大外科二
今里栄二郎　久大形成外科
沖田　光紀　内科二
加藤　博彦　眼科
久木田稔正　鹿大内科一
小畑　八郎　鹿大内科
古賀　一吉　小児科
重川　浩司　愛媛大産婦人科
田島　徹　熊大麻酔科
道永　成　泌尿器科
守屋　豪貴　鹿大外科一
山本　淳也　筑紫病院内科
吉田　幸彦　愛媛大外科一
入江　豊　筑紫病院整形
桂　久和　鹿大整形外科
佐々木道生　香医大皮膚科
下河邊建彦　整形外科
棚橋　慎治　昭和大形成
新垣香代子　琉球大内科
生野　俊治　内科一
奥屋　昌司　岐阜大内科
加月力之祐　精神科
後藤　英文　整形外科
高嶋　雅樹　九大外科一
豊田　徳明　熊大外科
平井　正朗　精神科
福田　有子　久大小児科
別当　尚　聖徒病院内科
新井　孝　精神科
松添　大助　外科二
矢野　裕子　麻酔科
平塚　俊哉　整形外科
八尋　正文　外科二
吉田　哲也　内科一
佐藤　哲紀　筑紫病院整形
猿渡　雄吉　耳鼻咽喉科
白石　素公　内科二
長山　周一　鹿大外科一
深川　博　佐医大外科
中川　繁幸　整形外科
三浦　康志　泌尿器科
石野　弘之　麻酔科
中道　俊文　眼科
和田　耕一　放射線科
飯塚　佳彦　内科一
竹原　尚之　外科一
原　忍　内科一
吉本　正彦　長大内科
成富　徹　整形外科

教室便り

学位取得

次の方は、昭和六十三年十一月十一日付で、福岡大学より医学博士を授与された。

武田　典夫（内科学第一）
論文名「ラット成長ホルモンの精製およびそのインスリン分泌に及ぼす影響」

仁位　隆信（内科学第二）
論文名"Changes in Hemodynamics and myocardial contractility during chronic sodium depletion in conscious dogs."

笹栗　学（内科学第二）
論文名"Identification of [Hydroxyproline^3]-lysyl-bradykinin released from human plasma protein by kallikrein."

松永万鶴子（麻酔科学）
論文名「術後痛に対する硬膜外 buprenorphine の臨床的研究――主として上腹部開腹術後痛への効果――」

櫻木　忠和（麻酔科学）
論文名「培地接触法による皮膚消毒薬効力検定の実験的研究」

崎村　正良（麻酔科学）
論文名「高血圧自然発症ラットにおけるRenin-Angiotensin 系および Atrial Natriuretic Peptide の中枢性循環調節における作用相関」

次の方は、平成元年三月二十三日付で、福岡大学より医学博士を授与された。

田代　京子（内科学第一）
論文名「肝胆道疾患とくにアルコール性肝障害における赤血球膜脂質と血漿脂質に関する研究」

平野　基（内科学第一）
論文名「肝細胞癌のエタノール注入療法に関する基礎的ならびに臨床的研究」

廣岡　満（内科学第一）
論文名「脳梗塞患者の運動負荷による血液粘度の変動」

前田　正存（内科学第一）
論文名「脳梗塞患者の予後――多変量解析による再発因子の検討」

野田　慶太（内科学第二）
論文名"Pathological regional angiotensin II and kinin formation and infarct size in ischemic dog heart."

義村　勝（精神医学）
論文名「精神分裂病の家族に対する支持的教育介入――特にその家族力動との関連について――」

堤　龍喜（精神医学）
論文名「こどもの精神分裂病――この発症過程からの考察」

井手　豊（脳神経外科学）
論文名「脊髄誘発電位の二次元表示に関する実験的研究――急性脊髄圧迫による変化について――」

中村　明生（整形外科学）
論文名「膝関節における応力分散の基礎的および臨床的研究」

高尾　雄平（眼科学）
論文名"B-scan ultrasonographic findings of prematurity."

清澤　崇晃（眼科学）
論文名「補体及びマクロファージの活性化を指標とした眼内レンズ材料の起炎症性の検討」

加藤　整（眼科学）
論文名"Experimental traction retinal detachment after intravitreal injection of platelet-derived growth factor, transforming growth factor-beta and fibronectin."

前田　純雄（健康管理学）
論文名「人間ドックにおける血液生化学検査異常，特にγ-GTP 異常の背景因子検索に対する分析」

石川　篤（解剖学第二）
論文名「ハムスター脳動脈の血管構築と神経支配」

西園　久徳（解剖学第二）
論文名"Early lesions of the colonic mucosa in the ulcerative colitis. —A scanning and transmission electron microscopy.—"

吉田　尊久（病理学第一）
論文名"ATLA positive adult T cell leukemia/lymphoma with monoclonal proviral DNA. Clinicopathological and immunological study."

東原　秀行（病理学第一）
論文名「肝細胞癌・Satellite nodule の臨床病理学的検討」

受賞

俞　孝一（内科学第一）
第二回大学勤務医福岡県医師会長賞
研究業績「肝臓癌におけるリンパ球サブセットの免疫学的解析」

比嘉　和夫（麻酔科学）
全国私立大学麻酔科教授会議優秀論文賞
研究業績：Factors influencing the duration of treatment of acute Herpetic pain with sympathetic nerve block: importance of severity of herpes zoster assessed by the maximum antibody titers to varicella zoster virus in otherwise healthy patients. (Pain 32: 147–157. 1988)

学術交流

昭和六十三年十一月以降の海外留学又は海外から本学への留学者はつぎのとおり。

海外留学

①研修先②目的③期間
上村精一郎（内科学第一）
① Hepatopancreatic Research, Veterans administration Medical Center ②アルコール性肝障害における線維化の機序（実験的研究）共同研究③1・1～3・12

内藤　説也（内科学第二）
①英国・ロンドン大学 Guy's Hospital Renal Unit ②臨床腎臓病学，特に腎移植術前後の患者管理と拒絶反応の防止③1・1・1～3・31

菊地哲次郎（整形外科学）
①カナダ，トロント，Dept. of Orthop. Surg., Wellesley Hosp. University of Tronto ③1・1～

自見　至郎（病理学第二）
①米国，イリノイ大学②動脈硬化の病理③62・4～2・3

リサーチビジター

①所属②目的③期間④訪問先
江　永言（Chiang Yung Yen）①台湾，中山医学院歯学部研究生②腎臓病理と外科病理の研究のため③63・4～2・3④本学病理学第二講座

新刊紹介

福大医学会会員が執筆した著書または単行本を以下紹介する。（①書名 ②発行所 ③発行年 ④価格）

▽奥村　恂（内科学第一）①臨床栄養学提要(共同編著) ②医歯薬出版③一九八八・一二・一〇④二，二〇〇円

▽奥村　恂（内科学第一）①内科処方の実際(共同編著) ②大道学館③一九八八・九・三④六，〇〇〇円

▽奥村　恂（内科学第一）①今日の治療指針(一九八九) ②医学書院 ③一九八九・二④一四，〇〇〇円

▽浅野　喬（内科学第一）①糖尿病（ワンポイントアドバイス）馬場茂明・土井邦紘編(分担)②医歯薬出版 ③一九八八④四，五〇〇円

▽広木忠行（内科学第二）①図でみる心・血管系の病態生理―心ブロックの病態生理―(分担) ②メジカルビュー社③一九八九・一・五④六，〇〇〇円

▽吉田　稔（内科学第二）①診療内科学―症候群（呼吸器疾患）―(分担) ②金原出版KK③一九八九・一・二五④二二，〇〇〇円

▽荒川規矩男（内科学第二）①スポーツ医学Q&A―高血圧症の運動療法―(分担) ②金原出版KK③一九八九・二・二八④六，五〇〇円

▽小出禎一（小児科学）①小児の心筋炎・心膜炎(分担) 今日の治療指針②医学書院 ③一九八九・二・一五④一四，〇〇〇円

▽満留昭久（小児科学）①日本小児神経学会卒後教育委員会編「小児神経学の進歩」第17集(分担) ②診断と治療社③一九八八④五，五〇〇円

▽満留昭久（小児科学）①渡辺一功編「小児神経疾患診療ハンドブック」②南山堂 ③一九八八④九，八〇〇円

▽利谷昭治（皮膚科学）①皮膚疾患最新の治療'89～'90(分担) ②南江堂③一九八九④七，五〇〇円

▽利谷昭治（皮膚科学）①カラーアトラス皮膚科診療 Questions & Answers Part 2 (分担) ②六法出版③一九八八④二五，〇〇〇円

▽調　重昭（耳鼻咽喉科学）①前庭神経節細胞と前庭神経炎(分担) ②山口大学迷路会③一九八八・一二・二〇④五，五〇〇円

▽調　重昭（耳鼻咽喉科学）①今日の治療方針31(分担) ②医学書院③一九八九・二④一四，〇〇〇円

▽調　重昭（耳鼻咽喉科学）①糖尿病（ワンポイントアドバイス）馬場茂明・土井邦紘編(分担)②医歯薬出版 ③一九八八④四，五〇〇円

▽広木忠行（内科学第二）①図でみる心・血管系の病態生理―心ブロックの病態生理―(分担) ②メジカルビュー社③一九八九・一・五④六，〇〇〇円

▽白石君男（耳鼻咽喉科学）①EEG TOPOGRAPHY 1987 第6回二次元脳電図研究会講演集②にゅーろん社③一九八八・一一・一〇④八，五〇〇円

▽大島一寛（泌尿器科学）①Modern Technics in Surgery: Urologic Surgery (分担) ②Futura Publishing Company ③一九八八

▽有吉朝美（泌尿器科学）①Prostate Cancer (分担)②Elsevier Science Publishing Company ③一九八九④二三，六五〇円

▽後藤安正，辻　祐治（泌尿器科学）①Prostate Cancer (分担) ②Elsevier Science Publishing Company ③一九八九④二三，六五〇円

▽井上幹夫（健康管理学）①三好秋馬編，過敏性腸症候群の診断と治療(分担) ②医薬ジャーナル社③一九八九・四・一〇④四，〇〇〇円

▽松岡雄治（生化学第一）①Human Tumor Markers (Editors: S. W. Ting, J.-S. Chen, M. K. Schwartz) (分担) "Chemical and antigenic structure of CEA analyzed by using recombinant CEA peptides and monoclonal antibodies." ②Excerpta Medica, Amsterdam–New York–Oxford ③一九八九

▽菊池昌弘（病理学第一）①Annual Review 血液 1989 (分担) ②中外医学社③一九八九・一・一〇④七，〇〇〇円

▽菊池昌弘（病理学第一）①病理学各論 第2版(分担) ②日本医事新報社③一九八九・二・六④八，五〇〇円

▽菊池昌弘（病理学第一）①病理学 第5版(分担) ②医学書院③一九八九・四・一④一九，五〇〇円

▽岩崎　宏（病理学第一）①わかりやすい病理学（分担）②南江堂③一九八九・四・一〇④二，五〇〇円

▽竹林茂夫（病理学第二）①現在病理学大系15A腎臓1、腎の循環障害(分担) ②中山書店③一九八九④三三、四七五円

来訪

昭和63年11月以降、本学医学部または病院を訪れた外国人学者はつぎのとおり。①所属 ②目的 ③来訪日 ④訪問先

中久喜雅文 ①もと東京大学精神科講師（現在アメリカ・コロラド州デンバー市にて精神分析的療法家として活躍中） ②教室講演会「アメリカ精神医学の現況、ことに力動的精神療法の動向」 ③63. 11. 14. ④精神医学教室

Dr. Alfred Freedman (Prof., New York Medical College, USA) 他、韓国、中華人民共和国、香港、フィリピン、ベトナム、マレーシア、オーストラリア、シンガポール、ニュージーランド、アメリカ合衆国、スイスから「21世紀のための精神医学教育に関する WHO と WPA の合同会議」に参加した18名） ②福大病院精神科の施設見学および学長招待レセプション ③1. 3. 14. ④精神医学教室

Dr. Efrain Bleiberg ①カール・メニンガー精神医学校長（アメリカ） ②教室講演会「幼児体験と精神発達理論」 ③1. 4. 14. ④精神医学教室

金　学洙 ①白求恩医科大学皮膚科・副教授 ②講演「M. canis の大分生子について」 ③63. 11. 24. ④皮膚科学教室

張　豁辻 ①白求恩医科大学皮膚科 ②講演「中国東北地方における真菌症について」 ③63. 11. 24. ④皮膚科学教室

王　双元 ①北京医大付属第三院皮膚科・教授 ②講演「下腿結節性皮膚疾患の病理学的検討」 ③63. 12. 15. ④皮膚科学教室

車　乃増 ①西安第四軍医大皮膚科・教授 ②講演「下腿部結節性皮膚疾患に対する漢方医の治療その1」 ③63. 12. 15. ①皮膚科学教室

宋　斌 ①西安第四軍医大伝染科 ②講演「下腿部結節性皮膚疾患に対する漢方医の治療その2」 ③63. 12. 15. ④皮膚科学教室

Ernst Kraas ①西ベルリンモアビート病院外科第一教授 ② Combined endoscopic-surgical treatment for common bile duct stones in high risk patients（ハイリスク総胆管結石患者の内視鏡―手術併用による治療）〔総合研究所主催研究会にて講演〕 ③1. 4. 3. ④外科学第一教室

Harvard Ellman ①Associate Clinical Professor, Orthopaedic Surgery UCLA, USA ②第1回九州スポーツ医・科学会にて講演 "Shoulder arthroscopy in athletes." ③63. 11. 6. ④整形外科学教室

Jiunn-Jer Wu ①Orthopaedic Department, VGH, Taipei, Taiwan ROC ②第1回九州スポーツ医・科学会にて講演 "Clinical experience of ACL reconstruction." ③63. 11. 6. ④整形外科学教室

Wolf-Dieter Montag ①Dr. for Orthopaedics, Sports medicine, Weilheim West Germany ②第1回九州スポーツ医・科学会にて講演 "Relations between sports doctors and athletes in the Federal Republic of Germany." ③63. 11. 6. ④整形外科学教室

Olivier Leclair ①Orthopaedic Fellow, National Hospital TOULOUSE France ②肩関節の鏡視下手術 ③1. 1. 23. ④整形外科学教室

Tony L. Yaksh, Ph. D. ①Prof. of Pharmacology, Dept. of Anesth., Univ. of California at San Diego ②講演 "New horizon in the use of spinal drugs for pain control." ③1. 4. 11. ④麻酔科学教室

Prof. Zamboni ①U. C. L. A. 病理学教授 ②解剖学 山田英智教授と情報交換 ③1. 4. 10. ④解剖学第二教室

李　英浩　教授他2名 ①韓国延世大学 成形外科学教室 主任教授 ②福岡大学医学部 表敬訪問および成形外科現状調査 ③1. 4. 16. ④解剖学第二教室

Bong Hak Hyun ①Thomas Jefferson University Hospital (Clinical Professor & Director of Hematology) ②講演 "Pathology of bone marrow biopsy." ③1. 2. 14. ④病理学第一教室

福岡大学医学会 例会の報告

第20回例会

日時　平成元年二月十五日（水）
　　午後4時～5時
場所　福岡大学医学部臨床大講堂
　　座　長　坂本　公孝　教　授

1、「福岡大学病院における臨床神経生理検査の現況」
　　小児科学　満留　昭久　教　授

2、「尿路変向術の変遷」
　　泌尿器科学　有吉　朝美　教　授

編集後記

今回は福大では初めて国際的レベルで開催された第一回福大医学シンポジウムのニュースで第一面を飾ることができた。隣の産業医大では毎年公害・重金属中毒関係の国際シンポが開催されている。福大でもこの種の国際会議の開催は決して背伸びしたことではなかろう。皆さんの英智と協力でこうした教育・研究会が頻回に開催できるよう期待したい。（竹林）